燃やす
陶器作りと私

片田佳子

現在のように世の中の物資が豊富になり、自分の欲しいと思う物が、殆ど手に入るようになると、物に対する執着心が薄れていくような気がしてならない。よく、「昔の人は物を大切にした。」ということを聞くと、私自身この言葉に対して納得することができる。

もともと私の育って来た環境を振り返ってみると、物資豊富で何でも使い捨て時代という中を通り抜けて来た。そんな中で、何か自分で手を触れて物を創ってみることが出来ればと思うようになった。この考えが根底となって陶器作りを始めるようになったのかもしれない。元来、土に触れるということは、幼い時の泥や砂遊びから始まっている。形のない小さな粒に、適当な水分を加えて、自分が作ってみたいと思う形に近づけたり、作っている途中で別の考えが浮かんでもとの形とは違う物に仕上げていくという面白さは、誰でも一度は味わっていることだと思う。たまたま私の場合は、その時の気持ちを現在の陶器作りに当て嵌めてしまったような気もする。

土を捏ねて、ろくろをひいて物を作りあげ本焼して仕上げる事は、誰にでも練習を重ねれば出来ることなのだが、この誰にでも出来ることの中で、私が大切だと思うことは、何か一つの物を作りだす時のその人の考え、感情が、その作って出来上った物の中に表現されていなければいけないということである。

考え、感情のない器は、機械で作られている量産品で世の中にあふれる程あるし、また機械で作られる物ではなく、職人さんの作る量産品も、やはり感情のこもらない器のような気がする。器も量産されるようになれば使う人も多くなり、安価で手に入るようになれば使い方も乱雑になり、それが使い捨てにつながってしまうのではないかと思う。だからといって、馬鹿丁寧に器を扱うということではなく、物を大切に使うという気持ちを持つ

ことが必要なのではないかと思う。

実際に、自分で一つの物を最初から最後まで作り上げてみると、それを作る時の熱中した気持が必ず作った器に出て来るから不思議なのである。そして出来上った器がどんなに歪んでいたとしても、その器が大切に思えて来ることもまた不思議なのである。

ひとつの器を、自分ではある程度まではコントロール出来る火の力を使って、自分の表現したいことになるべく近づけて焼き上げた時の気分と、疲れは何ともいえないものである。

ここで私なりの陶器作りの手順などについて話します。一般的には粘土で物を作って、窯で焼く事が陶器作りですが、窯に入れて焼くに至るまでには数多くの工程を経ること、と技術が必要となる。まず、私の場合は自分が作りたいと思う器の土の種類の選定から始まり、どういう形の器を作るかを決定する。そして作ろうと思う器の大きさと形をスケッチブックに書き留め、その器のどの辺に、どんな絵つけをするのかを、やはりスケッチブックの上で考える。まだ土に手を触れて作っているわけではないのだが、その時の気持ちもなかなか良いものである。もちろんスケッチブックに書き留める時は、なるべく毛筆を使うことにしている。これは絵付けの時に毛筆を使用するので、その練習も兼ねる為だ。

一つの案が出来ると、土を練り、ろくろを回して器を作り始める。この時は自分の考えた器の形を思いながら無心になって、ろくろをひく。何度か失敗を重ねて器を作り上げる。その器を乾燥させ、高台を削り出してまず素焼する。この時いくつか、割れるものもある。素焼が終わった器に絵付けをし、本焼する。千二百六十度から千二百八十度の間の温度で焼き上げるのだが、理論的な温度で焼いても微妙な点で焼き上りが違ってくる。これが窯の外からではコントロール出来ない火の力なのではないかと思っている。だから数えきれない程窯を焚いても、いつも出来上りが違うのには驚かされる。もしかすると、その窯を焚いている時の気持ちが、焚きあげている間に窯の中の火に影響しているのかな、と感じてしまうぐらいである。

こんな気分を一度でも味わってしまうと、陶器作りというものは、なかなかやめられなくなってしまう。いつしか時を忘れて、昼も夜も熱中してしまうのである。出

来上った器が美しい物でも、作り上げるまでは泥沼の中に居るようだ。髪は振り乱して、手は土で荒れてしまい、とても人に見せられるスタイルではないのである。でも、こんな汗と土で汚れて窯を焚きあげ、器を作り上げた時の何ともいえない気持ちは、口では言い表わせないのである。

こういう気持ちの流れの中で、この頃は以前とは少々違った考えが自分の内に加わったような気がする。学生時代は、男女を問わず仕事を教えられて、「なに男性に負けてたまるか」という気持ちで仕事を学んだのですが、最近では、女性には女性の、物に対する興味の持ち方があるのだから、男性に負けずに、という気持ちではなく、私らしい気持のようになったのである。子供を育てながらの仕事は、一人の時とは大違い。男性の力に張り合っていたのでは、いつか、どこかで自分を見失なうと思い、この頃は、ゆっくり、じっくり、物作りをしたいと思うようになった。一生かかっても自分の考えているような、思ったような作品は作れないかもしれないが、一つ一つの作品に何か、私らしさみたいなものが表現できればと思っている。

もう一つ、自分の内に加わった考えがある。それは器を使う時の気持ちなのであるが、自分の作った器は楽しんで使うのが一番であること。一応は目的を定めて器を作るのではあるけれど、その器を、いろいろと楽しんで使うことが、生活を満たすのではないかと思う。よく小さな子供には、割れてしまっても良い、という器や、プラスチックの器を使って食事をさせる人が居るけれど、やはり小さな子供にも、使いやすく美しいと思う器を使って食事や、おやつを食べさせることが、その子供に、知らず識らずのうちに、いろんな事を感じさせるようになるのではないかと思うようになった。親が大切に使っている器を、子供にも使わせることにより、物を丁寧に扱うことを知り、これが器のみではなく、いろいろな物も、大切にすることを、身につけていくのではないかと思う。使い捨ての時代はこれからも続いていくのだろうけれど、こんな些細な事から、物を大切にする気持ちを感じてくれればという願いかもしれない。

このようなさまざまな気持ちの移り変わりや、生活の変化の中で、ずっと長い間、器を作るという仕事を続けていけたらと思っている。

（陶芸家）